

の文哲学部哲学科に客員教授として迎えられ、昨年9月-12月、市の郊外で生活を送った。今後とくに若い同僚諸君は、同種の機会に恵まれることも多くなると思うので、何らかの参考になるかと考え、この時の体験を報告させていただく。

わたくしを招いてくれたのは哲学部の友人ヴユナンベルジャ教授(J.-J. Wunenburger)であるけれども、客員教授の招聘は大学人事委員会の権限に属し、今度の場合にも、恐らく学科学部段階の合意を踏まえて、人事委員会宛てに正式の履歴書業績表を提出するよう要請があった。しかし客員教授の資格認証と給与の号・等級を記した、ディジョン・アカデミー総裁名の公式書類が届いたのは、かなり時間が経ってからであり、その時点でわたくしはすでに哲学の授業を始めていた。

ディジョン大学におけるわたくしの義務は二つあった。第一は基本的な授業負担で、「メタフィジク」および「古代哲学史」を各2時間ずつ週2コマ担当し、さらに授業日程終了時に、口頭試問による成績評価を出すことである。これは相当厳しい要求であった。と言うのもたとえば、前記の授業課目名を知らされたのは授業の始まる前の週であり、わたくしはもちろんそれより早く日本を発っているから、出発の時点で何を準備すべきか大いに迷ったのである。客員教授と呼ぶのはほとんど大陸内部からであって、わたくしも同等の扱いを受けたのであろうか。最

客員教授体験の記

柴田 有

ディジョン市はブルゴーニュ地方の県庁所在地、同市の北東部新興地に国立大学が位置する。このディジョン大学は5-6年前から「ブルゴーニュ大学」と正式名称を変更した。わたくしはこの大学

後の授業の日であったが、数人の学生から、また講義に来てほしいと言われた時、非常に嬉しかった。

第二点は客員教授としての義務ではなく、むしろ腕を振るう機会と言ってよかろうが、専門家を対象とする特別講義 (conférence) を行うことである。これはブルゴーニュ哲学会と大学哲学科が共催してくれた。図版はその時のチラシである。大学トリセの哲学教員および退官教員、それに学生を前に一時間の講義をし、引き続き一時間の討論があった。講義題目は“L'idée gnostique de l'identité humaine” (グノーシス主義のアイデンティティ論) とした。この機会は有難かった。そこで初めて哲学科の同僚たちと、学問上の議論を交わすことができたからである。

La Société Bourguignonne de Philosophie
et le Département de Philosophie
vous invitent à assister à la conférence de

Monsieur You SHIBATA,
Professeur

sur : "L'idée gnostique de l'identité humaine"

MARDI 15 DECEMBRE 1992
à 18 heures
Salle du Conseil Lettres

学者の接触の場を準備し知的交流を生み出そうとする努力は、フランスの大学生活を通じて学んだ点のひとつである。人の交流のための機会が実に多く用意されていて、国際学会 (colloque) はもちろん、姉妹校制度、「エラスムス」

と呼ばれる交換教授 (および学生のための国際的な単位互換) 制度などによって、内外の学者が町に滞在しまた去ってゆく。そうした折に研究者同志食事をし、家に泊め、話をさせる。人々はそのために気を配り、時間を割くことを惜しまない。文化交流は、大学の研究所の主要な機能のひとつになっている。ヨーロッパの大学には、そういう伝統が残っているようであった。

(しばた ゆう)

所員、国際学部教授)